

...の...の...の...

...か女武者あますすあもら十

...と教カケキ手解糸くかねは今うり

...ものがるまぐいで一軍嬉

...とヤラハ己ト少も駭ガかすわごと記カ

高橋義孝（たかはし よしたか）

文学博士。大正二年東京に生れる。東京大学
独逸文学科卒業。北海道大学、九州大学、名
古屋大学などで教鞭をとった。現在、桐朋学
園短大教授。日本文芸家協会、日本エッセイ
ストクラブに所属している。独文学者、評論
家、エッセイスト、あるいは横綱審議会委
員、東京都教育委員会委員、NHK解説委員
として広い分野で活躍中である。著書に高橋
義孝・文芸理論著作集・二巻、昭和三十年読
売文学賞を受けた『森鷗外』、その他がある。
また『叱言たわごと独り言』『蝶ネクタイと
オムレツ』のような小意気な随筆集もある。
翻訳書にはトーマス・マンの『魔の山』、ゲ
ーテの『ファウスト』などのほか、フロイ
ド、ユングなどの精神分析関係のものも多
い。

粹と野暮のあいだ

昭和五十五年一月二十五日 第一刷発行
昭和五十五年三月三十一日 第四刷発行

著者 高橋義孝

発行者 江口克彦

発行所 P H P 研究所

〒六〇一 京都市南区西九条北ノ内町十一

電話 〇七五・六八一・四四三一

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 株式会社 大進堂

©Yoshihaka Takahashi 1980 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えします

粹と野暮のあいだ

目次

春風秋雨

冗談を厭味で返す田舎者 11

片雲の風にさそわれて 13

セント・アンドルースの朝 16

一つの敗北 18

浴衣には素足がいい 20

老来とみに 22

すずらんパーティ 24

春風秋雨 26

木枯しの音を聞きながら 28

たんま

墨を磨る 33

心のペンチ 36

えー毎度お粗末の一席を 41

嗟々間抜け人生 43

表と裏 —— あるいはある対立

- 立ち小便の顔 —— 芸術と現実 53
- 林檎の向う側 —— 内なるものと外なるもの 55
- ゴッホの古靴 —— 「何が」と「如何に」 58
- ただぼんやりと —— 「深い絵」と「浅い絵」 60
- 形もなくうごめいているもの —— 官能と魂 62
- さかい目の話 —— 粹と野暮 65
- 床の間のうしろは便所 —— 長所と短所 66
- 巨大な茸 —— 自然空間と人間空間 69
- 海に注ぐ河 —— 「内」と「外」 71
- 二にして一なるもの —— 必然と偶然 73
- 蝦蟇口を撫でさすって —— 幸福と不幸 75
- 一葉の写真 —— 悲しい思い出と楽しい思い出 77
- 一枚の紙の表裏 —— 苦の数と楽の数 79

永遠の現在 —— 死ぬまで生きている 82

母なる大地 —— 静と動 86

美 —— 主観と客観 90

書架の片隅

上海版活版本『史記』 99

宇宙的な好奇心に駆られて 103

素朴な物探し 107

東京生れの作家 111

古い小篇 115

君看ヨ双眼ノ色 118

荒男の言葉 120

親鸞失踪 122

言葉考 —— 他意はないらしいが

日本語と私 127

漢字嫌い 129

名文の秘密	136
ト・キ・オ——固有名詞の読み方	140
一統の旗をなびかせて——物の名	144
旧弊人の綴り方教室	148
転がる言葉——手紙考	152
「彼」と「彼女」	159
プレタ調の既製服?	163
一人よがりな文章	167
月の人——日本的な共存	170
荒波の中の言葉	174
アラビア数字の闖入	178
露路裏の伝授	182
共通語	185
ある訴訟事件	188
乾杯と献杯	192
ヨシツネとサクラコ——命名	196
他意はないらしいが	199

辞書を持って無人島へ
ひとり歩きする日本語
207 203

あとがき
211

粹と野暮のあいだ

装帧 上田晃郷

试读结束：需要全本请在线购买：www.ertongbo.com

春風秋雨

冗談を厭味で返す田舎者

ある趣味人がロンドンのブリッグの商品カタログを呉れた。馬具商として有名な店で、このうちの洋傘も世界にその名が通っている。ロンドン児の洒落た奴はみなブリッグの傘を持って歩く。カタログを見ると、洋服が一着入る旅行鞆が出ていた。先年ドイツでそういう鞆を買って日本に持ち帰り、一寸した旅行にはいつもこの鞆を使った。大きいが、薄手で、格好のいい革鞆であるが、近頃少しくたびれてきて、コバの革がところどころ擦り剥けてきた。そして少し貧相な様子になった。この頃日本では、服の一着入る半月形の鞆が流行しているようだが、あれはいかにも月並で、換えの服も一着持って旅に出ましたよと云っていて、少々厭味で、何か薄っぺらな感じがあるので、あれは買いたくない。そこで、銀座のある店を通じて、直接にブリッグへ例のカタログの鞆を注文した。半年近くかかって、先日やっと待望の品が届いた。ヨーロッパ風に重厚な、見れば見るほどいい鞆である。

折よく京都で日本独文学会の秋期研究発表会が開かれるので、この鞆を提げて京都まで出向くことにした。京都の町でべったりと親しい友人たちに出会った。やはり学会のために京都にきていたのである。そこで学会へ行くことはやめにして、まず一杯ということになった。その

夜は悉く酩酊した。翌朝、いろいろと買って帰るものも予定していたが、何だかもう面倒臭くなってしまう。午前中に、例の鞆を提げて新幹線で東京へ帰ってきてしまった。結局鞆のために東京、京都の間を往復したことになる。うちへ帰ってからも、鞆は納めせずに、座敷の隅に立てて置かせて、廊下を往ったり来たりする度毎に、ちらりちらりと鞆の方を見る。

十一月下旬には九州の佐賀で日本独文学会西日本支部の総会があり、また九州大学で一年度の集中講義もあり、相撲もあるし、千秋楽の翌日には、ドクトルK氏に名儀を譲り渡した「大日本フロ・ゴルフ連盟」の年次ゴルフ・トーナメントがある。「フロ」であって「プロ」ではない。その時の九州旅行へは、どの鞆を持って出ようか。古いドイツのにしようか、新来のロンドン鞆にしようか。

ある日、家内に「こないだから、どっちの鞆を九州へ持って行こうかと迷っているんだ」と云ったら、「いろいろとお楽しみがおりになって、よろしうございますね」と云われた。

そう云われた途端に、何とも云えず厭な、不快な気分が襲われた。むろん私の云ったことは冗談である。滑稽味を狙って云った文句である。不快な気分は容易に消えない。気が変わるかと思つて床屋へ行った。床屋から帰っても気が晴れない。どうにも困ってしまった。そのうち、耳に何か川柳の文句みたいなものが聞えてきた。

片雲の風にさそわれて

この五年間、大体一週間に一度、東京の自宅と名古屋大学との間を新幹線で往復した。新幹線の車輛はきれいで快適だと思っていたが、去年久し振りにドイツ国内を鉄道で旅行し、やはりドイツの鉄道の方がいいと思った。車体がどっしりとしていて、何から何までが大きくがっちりしているし、席もゆったりしている。こういうところにも国民性の相違が反映している。

さて新幹線を利用していて気がついたことの一つにこういうことがある。つまり車内の通路を人が行き来しすぎるといふことである。私はむろん走っている最中のことをいっているのだが、通路を人がやたらに往ったり来たりする。便所に起つ人もあろうし、売店へ買い物に行く人もあろう、また食堂へ行く人もあろう、それにしても何だかそれらの人の数を上廻る数の人間が通路を往ったり来たりするように思う。それに加えて車内販売のワゴンがくる。車掌さんの行き来がある。というわけで、車内の通路はさながら都大路の雑踏に似た賑やかさである。

私は、何らかの必要があつて通路を通る人の数はきわめて少かろうと判断する。行き来する人たちの大部分は、ただわけもなしに列車の中を歩き廻っているのだと判断する。東京から名古屋までの二時間、あれほど車内を往ったり来たりする用事があるとは到底考えられない。

この通路トンビには、若い人が多い。髪を長くして、幅の広い襟の背広を着て、ラッパ・ズボン穿いた若い男が断然多い。

特殊なケースとして考えられるのは、高校生が団体で乗り込んでいる場合である。これはもう全くいけない。東奔西走して「席の暖まるとまなし」というところである。しかも高校生、四人、五人と隊伍を作つて車内を移動する。新幹線に乗つて、それが珍しくて、嬉しくて気もそぞろで、座席なんかには坐つてはいられないというところであろう。高校生の団体と乗り合わせたら最後である。うるさくて、目先がちらくちらして、とても落着いて煙草などくゆらしてはいられない。また中にはあの狭い通路を駆けて行く高校生がいる。どういうつもりで駆け出すのか、その心事は全く忖度しかねる。しかしこれは子供のことだから目くじらを立てるにも及ぶまいと思う。それにしても煩いことは煩い。列車の中は遊園地ではないのである。

不安神経症の一種にアゴラフォビアというのがある。精神医学界ではこれに広場恐怖という訳語を当てている。これは街路や広い場所に出ると恐怖、不安を覚えて、道を歩いて行くことができない、広場を突切ることができないという症状を示す神経症である。しかし保護者に当る人間（妻あるいは夫、両親など）が付き添うと、この不安症状は消滅することが多いらしい。従つて神経科医は、この不安形成の背後に、患者の側におけることさらに強烈な母親への心的固着を推定する。